

# 「生き生きと働く実践力のある助産師キャリアアッププログラム」 実施報告 2016

松井 香子<sup>1</sup>・江藤 宏美<sup>1</sup>・加藤 千穂<sup>1</sup>・佐々木規子<sup>1</sup>・永橋 美幸<sup>1</sup>  
宮原 春美<sup>1</sup>・大石 和代<sup>1</sup>・赤星 衣美<sup>2</sup>・野間田真紀子<sup>3</sup>

保健学研究 30 : 75-81, 2017

**Key Words** : 助産師, キャリアアップ, 社会人学び直し大学院プログラム, クリニカルラダー

(2017年3月8日受付)  
(2017年4月24日受理)

## I. はじめに

昨今における産科医療の現状から、助産師の質の向上と実質的な量の確保は喫緊の課題となっている。現在就業中もしくは今後復職を希望する助産師に、大学院レベルの学び直しの機会を提供し、周産期医療・ケアの最新の知識と技術を修得してもらい、自身のキャリアアップの一助のため「生き生きと働く実践力のある助産師キャリアアッププログラム」を開始し、約2年半が経過した。本プログラムは文部科学省の委託事業であり、「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」の一環として行っている。実施期間は2014年度から3年間である。

2015年度(2015年4月～2016年3月)におけるeラーニング提供プログラムの配信状況と受講状況、eラーニングコンテンツにかかわる著作権、および他施設交流実習についての活動状況は、保健学研究の第29巻に報告した<sup>1)</sup>。

2016年度は、コアリーダー助産師認定コース2年目受講生7名に加え、同コース1年目受講生5名、プライマリ助産師認定コース(1年間)に受講生9名を迎え、総勢21名の助産師がプログラムのメンバーとなった。本報告では、2016年度の活動内容と委託事業終了後のプログラムの継続について述べる。

## II. 2016年度活動内容

### 1. eラーニングによる受講状況

2016年度の開講科目は、①Updateな情報(情報リテラシー)を修得する科目(2単位)、②Updateな実践能力を修得する科目(3単位)、③対人関係能力を修得する科目(1単位)の3科目に加え、コアリーダー助産師認定コース2年目、④教育力・指導力を修得する科目(2単位)、⑤専門性の意識改革を修得する科目(2単位)

の計5科目となった。1年間のプライマリ助産師認定コースは①～③の3科目6単位、2年間のコアリーダー助産師認定コースは①～⑤の5科目10単位をすべて取得して修了証が授与される。各科目ともに、2か月を1期とし、5期10か月にわたって科目を構成し、教育プログラムを提供した(表1-1, 表1-2)。

プログラムでは昨年と同様、VPN(Virtual Private Network)を介した講義配信システムにより、eラーニングを提供した。受講用に調整したノートパソコンおよびタブレット端末を貸与し、1期2か月毎にアクセスログから受講状況を確認し、また状況に応じて受講促進に関するサポートを行った。今年度の特徴として、2か月の配信期間内に教材へのアクセスが行われていない受講者が見受けられた。パソコン操作に慣れないこと、あるいは就業と学習の両立が難しかったこと、配信科目の分量やバランスが関連していることが推測され、その点は今後の課題であると認識している。

### 2. 対面授業・演習・実習

#### 1) 対面授業

eラーニング受講による学習は、とすれば受け身になりがちであるが、実践者にとって定期的に集まり助産師の仲間同士が意見を交わしあうことで学習を促進する一つの要素になると考え、以下の内容で対面授業も組み入れた(表2)。どの科目も助産師として勤務していく上で重要な内容であり、受講生同士が顔を合わせ実践の場面での事例を検討したり、ロールプレイによってより深くディスカッションを行うなど、有意義な時間を持つことができた。

#### 2) 演習

助産師としての実践能力の向上や視野を拡げ、自律し

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

2 長崎大学病院

3 プロジェクト・ママ さくらの里助産院

活動報告

表1-1. eラーニング配信スケジュール2016【プライマリ・コアリーダー両コース共通科目】

配信月	1. Update な情報を修得する科目	2. Update な実践能力を修得する科目	3. 対人関係能力を修得する科目
4月	臨床薬理学 高度生殖補助医療	妊娠期の健康診査 助産師が行う超音波検査 CTGについて	医療現場における接遇マナー
5月	臨床薬理学 高度生殖補助医療	妊娠期の健康診査 助産師が行う超音波検査 CTGについて <u>N CPR</u>	医療現場における接遇マナー
6月	遺伝に関する知識(1) 遺伝に関する知識(2) 遺伝に関する知識(3)	CTGについて フィジカルアセスメント	助産記録・医療記録 医療倫理
7月	遺伝に関する知識(1) 遺伝に関する知識(2) 遺伝に関する知識(3)	CTGについて フィジカルアセスメント <u>N CPR</u>	助産記録・医療記録 医療倫理
8月	産科合併症(1) 産科合併症(2)	フリースタイル分娩 産痛緩和(お灸, つぼ) 開業助産と管理	アサーティブネス～医療者への対応
9月	産科合併症(1) 産科合併症(2)	フリースタイル分娩 産痛緩和(お灸, つぼ) 開業助産と管理	アサーティブネス～医療者への対応
10月1日(土) 講演会「看護教育を拓く授業リフレクション～教える人の学びと成長～」			
10月	母子感染 ウイメンズヘルス 制度・施策(1) 制度・施策(2)	産褥期の健康診査 新生児の健康診査 <u>他施設交流実習</u> <u>助産所実習</u>	アサーティブネス～医療者以外への対応
11月	母子感染 ウイメンズヘルス 制度・施策(1) 制度・施策(2)	産褥期の健康診査 新生児の健康診査 <u>他施設交流実習</u>	アサーティブネス～医療者以外への対応
12月	EBMの実践に向けて(1) EBMの実践に向けて(2) EBMの実践に向けて(3) 産科領域ガイドライン(1) 産科領域ガイドライン(2)	<u>他施設交流実習</u>	意思決定支援 <u>認知行動療法に基づくコミュニケーション技法</u>
1月	EBMの実践に向けて(1) EBMの実践に向けて(2) EBMの実践に向けて(3) 産科領域ガイドライン(1) 産科領域ガイドライン(2)		意思決定支援
2月			<u>助産師とチーム医療</u>
3月		<u>ALSO</u>	

\*アンダーラインは対面クラス/演習、アンダーラインは実習

たケアを提供する目的で演習を実施した。内容は表2に示す通りである。

本プログラムでは助産師の実践能力向上のため、「新生児蘇生法講習会」を定期的で開催した。長崎市内での開催のみならず、上五島に赴き周産期医療関係者、他科の医師、および消防署からも参加してもらい講習会を実施した。長崎県は島嶼部を多く抱えているが、離島においても分娩を担う施設はあり、緊急の事態に備えて新生児蘇生法の知識や技術を習得することは重要であるためである。プログラム期間中に開催に関わった講習会は8回、延べ参加人数は医師15名、助産師72名、看護師16

名、救急救命士3名、助産師養成コース学生18名の合計114名となった。また、新生児蘇生法講習会のインストラクター養成についても支援し、講習会開催時のインストラクター経験の機会を設けるなど、県下の助産師10名が新たにインストラクターの資格を取得した。

「地域助産学演習」では、コアリーダー助産師認定コースのメンバーから5名が参加した。保健・医療・福祉関係者との連携を学ぶことや、地域の特性を把握した上で、母子保健事業に関するアセスメントができるということを目的とした。演習場所として長崎県五島市へ赴き、離島地域における保健医療福祉の状況の把握、離島

活動報告

表1-2. eラーニング配信スケジュール2016【2年目コアリーダー助産師コース科目】

	4. 教育力・指導力を修得する科目	5. 専門性の意識改革を修得する科目
4月	保健指導のコツと実際（～性教育を例に～）	長崎県の周産期医療 安全と施策
5月	保健指導のコツと実際（～性教育を例に～）	長崎県の周産期医療 安全と施策
6月	フィジカルアセスメント（母体） 災害時の対応の実際	安全と施策 キャリアディベロップメント 看護師のための文章ノート
7月	フィジカルアセスメント（母体） 災害時の対応の実際	キャリアディベロップメント 看護師のための文章ノート <u>地域助産学演習</u>
8月		<u>国際助産学演習</u>
9月	<u>ラボラトリー方式体験学習</u> 学びつづける組織風土	マネジメント 人に仕事を与える・任せる
10月	<u>医療専門職と倫理</u> 学びつづける組織風土	マネジメント 人に仕事を与える・任せる
10月1日（土）講演会「看護教育を拓く授業リフレクション～教える人の学びと成長～」		
11月	<u>助産学生の臨床指導</u>	開業助産師としての助産管理 変革（アントレプレナー）・リーダーシップ
12月	<u>助産学生の臨床指導</u>	開業助産師としての助産管理 変革（アントレプレナー）・リーダーシップ
1月	<u>助産学生の臨床指導</u> <u>フィジカルアセスメント（新生児）</u>	
2月	<u>助産学生の臨床指導</u> <u>フィジカルアセスメント（新生児）</u> <u>まとめのディスカッション</u>	
3月		

\* アンダーラインは対面クラス/演習、アンダーラインは実習

表2. 対面授業及び演習

	日程	科目名	授業名	講師 *敬称略
対面授業科目	2016年10月29日	4. 教育力・指導力を修得する科目	医療専門職と倫理	聖路加国際大学 鶴若 麻理
	2016年11月22日	3. 対人関係能力を修得する科目	ペリネイタルロスの支援におけるコミュニケーション	聖路加国際大学 蛭田 明子・石井 慶子
	2017年2月28日	3. 対人関係能力を修得する科目	助産師とチーム医療	長崎リハビリテーション病院 松坂 誠應
演習科目	2016年5月7日	2. Update な実践能力を修得する科目	新生児蘇生法講習会（専門コース）	日本大学医学部小児科学系 小児科学分野 細野 茂春 他
	2016年7月9日	2. Update な実践能力を修得する科目	新生児蘇生法講習会（専門コース）in 上五島	日本大学医学部小児科学系 小児科学分野 細野 茂春 他
	2016年7月24日～31日	5. 専門性の意識改革を修得する科目	地域助産学演習	長崎大学大学院 大石 和代
	2016年8月3日～11日	5. 専門性の意識改革を修得する科目	国際助産学演習	長崎大学大学院 江藤 宏美・松井 香子
	2016年9月17日	2. Update な実践能力を修得する科目	新生児蘇生法講習会（専門コース）	熊本市立市民病院 田中 裕子 他
	2016年9月23-24日	4. 教育力・指導力を修得する科目	ラボラトリー方式体験学習	体験と学びの会 博野 英二・松井 香子
実習科目	2016年10月19日	2. Update な実践能力を修得する科目	助産所実習	プロジェクト・ママ さくらの里助産院 野間田 真紀子
	2016年10月～12月	2. Update な実践能力を修得する科目	他施設交流実習	
	2016年11月～2017年2月	4. 教育力・指導力を修得する科目	臨地実習指導実習	

における産婦人科診療所の業務の実際、訪問看護の実際、新生児訪問や5歳児健診などの母子保健事業、開業助産師による地域活動の実際、へき地医療体制の把握と病院の役割、児童養護施設の活動の実際など多岐にわたる地域保健活動を視察し、また現地スタッフとの意見交換が行われた。受講生は普段は病院に勤務しており、離島から母体搬送されてくる症例を受け入れる側であることが多い。今回実際に地域の状況、とりわけ離島の状況を目の当たりにし、母体搬送に係る手続きの煩雑さや準備、実際の様子や苦勞、出産後に地域でどのように母子を継続的に支援しているかなども現地で直接的に意見交換することができ、相互の理解が深まった。顔の見える連携が必要ということは頭では理解していても、実際にお互いの状況に思いを馳せることは難しい。このようにお互いの状況を少しでも理解していることで、最終的には母子にとって安心できる医療の提供になることが可能になるのではないかと考える。

「国際助産学演習」では、2名のコアリーダー助産師認定コースのメンバーが参加し、アメリカオレゴン州、ポートランド市のOregon Health & Science University (OHSU) を訪問した。アメリカの助産師業務、助産実践の実際を学び、日本との違いや共通点を見出し、今後の助産実践に活かしていくことを目的とした。OHSU大学病院の産科病棟・分娩室・NICU病棟の見学、母親とベビーのクラス、夫婦で参加する産前クラス、助産所の見学、私立病院の母乳哺育センター訪問、母乳バンクの見学、National University of Natural Medicine（代替医療に関する大学）への訪問、現地の助産師・助産教員らとの交流を行った。今回の訪問を通じて、日米の出産を取り巻く現状や求められている助産師の役割、提供している実際のケアや助産教育等について共通点や相違点、また、母乳バンクなどの新たな試みに対する活動について意見交換を行うことができた。

「ラボラトリー方式体験学習」とは、K.レヴィンらがグループダイナミクス研究の成果を用いた民主的風土づくりのためのワークショップを発展させたものであり、学習者自らが様々な人間関係を実験的に体験しながら自己理解、他者理解、グループダイナミクス、リーダーシップなど学ぶ方法である<sup>2)</sup>。助産師として勤務をする中で、助産師自身は様々な人間関係の中で毎日を生きている。それは妊産褥婦や新生児とその家族はもちろんのこと、職場の同僚や上司、他職種のメンバー、看護・助産学生、また日常生活においても家族や友人に囲まれている。そして、その相手との関係は日々刻々と変化している。自分自身のことにまず目を向け、自己への理解を深めていくこと、そして他者と関わっていく中でどのように自分や相手を活かしながら、お互いの関係を作っていくか、人との関わりを通じてどう自分自身が成長していくかということは、一人の人間として重要なことではないかと考え、宿泊を含めたラボラトリー方式体験学習

をプログラムの一つとして企画した。学習のねらいを以下のように考え、このねらいに向かっていけるようなグループ実習や一人の時間を持ちながら進めていった。

#### ＜ラボラトリー方式体験学習のねらい＞

- ・自分の気持ちや想いに目を向けうけとめてみる
- ・自分の関わり方に気づき、確かめ、考える
- ・一人ひとりの特徴や想いに目を向け、相手をうけとめてみる
- ・体験からの学び方を知り、自分の可能性を探る

1日半の演習の最後に、ラボラトリー方式体験学習を体験してみている気づきや学びについて記述してもらったものを一部記述する。

- ・自分を承認してくれる人がいるという事は嬉しいものですね。年下の人にも承認の言葉をかけられるようちょっと努力してみようと思います。
- ・自分が思ったより他者は気づいている。
- ・少しでも一歩ずつでも自分の内面に近づけるようにしたい。
- ・人には一人一人歴史があり、様々な思いを持っていることもわかった。お互いのコンタクトによってプラスの方向へつながっていくこともできると思った。
- ・時には自分で自分を見て承認する。そして少し変化した。
- ・個人で考えること、何かをこなすこと、目標を達成させることは大切だけれど、人が集まると、個人では難しいことができる、それってすごいことだなと感じた。

#### 3) 実習

助産師としての実践能力の向上や視野を拡げ、自律したケアを提供する目的で実習を実施した(表2)。助産所実習・他施設交流実習については、1年目の受講生を対象として昨年同様実施した。ここでは、今年度初めて実施した2年目受講生を対象とした「教育力・指導力を修得する科目」の実習である「臨地実習指導実習」について述べる。

このコースに参加している助産師は病棟においてリーダー的存在であり、また学生指導を行う機会も多い。これまでも幾度となく実習指導の任を実行してきてはいるが、改めて臨地実習指導を経験し、その経験を振り返る中で、自己の課題をとらえ、今後どのように指導者として学生に関わっていくかを探るということを主目的として、実習を企画した。

この実習を行うにあたり、藤沢市教育文化センター主任研究員の目黒悟氏に講演「看護教育を拓く授業リフレクション～教える人の学びと成長～」を依頼し、事前に受講した。講師は長年看護教員とともに授業研究に取り組み、授業・実習指導とはどのような営みであるのか、自分の行った授業から学ぶということを実践を通して研



究されている。講演の中で、講義・演習・臨地実習に限らず、学生や新人、後輩に対する指導場面は、すべて『授業』であり、「教育的な関わり」の場であることや、自分と相手との関わりによって絶えず複雑に変化する「相互性」の場、すなわち「臨床の場」であるということ、自分が実現したい授業の方向（ねがい）を明確にして、授業に臨むこと等が受講生に伝えられた。講演後は実際に、自分が学生指導をした場面で、心に残っていることを取りあげ、「授業リフレクション」を実施した。受講生は、自分が関わった学生との間に起こっていたことを振り返り、自分の言葉でその経験を語り、語りの聞き手の助けを借りながら、自分自身の経験を意味づけることを体験した。

この講演後に、受講生は自施設での学生実習の際に、実習指導者の任をとり、事前に自分が授業（実習指導）に臨むにあたって「授業デザイン」を行った。これは「学習者の実態」「ねがい」「目標」「教材の研究」「学習環境・条件」「教授方略」の6つの構成要素を明確にし、それぞれの間の関連を考えていきながら、自分の実現したい授業（実習指導）の方向を意識して実際に実施していくというものである<sup>3)</sup>。受講生は事前に「授業デザイン」を行い、その上で授業（実習指導）にあたり、学生と関わる中で感じたことや気づきを適宜上記の授業デザインに加筆修正を加えながら、一連の流れを体験した。最終的には自分自身が行った授業（実習指導）を振り返り、次への課題や今後どうしていきたいかということを考えるようにした。

受講生のレポート内容を一部記述する。

- ・患者との関わりの中で自然と行っているリフレクション、つまり“今の発言が不快に思ったのではないか”という気づきや、“思ったような反応が得られない”という違和感を修正して、次の看護に活かそうとする行動を学生指導の場で活かす必要があったように感じる。
- ・学生と実習指導者は、対等という関係にはなかなかならない。それぞれのカラーもあれば、経験値も考え方ももちろん異なる。お互いが成長し、実りある実習にしていけるためには、お互い円滑なコミュニケーションをはかる努力をしていかなければならないと思う。

### Ⅲ. 評価・報告

#### 1. 第三者評価委員会の開催

今年度はプログラム実施3年目であり、文科省委託の最終年でもあり、当初掲げた目標・目的に照らして、現時点での達成度や事業のプロセス、進捗状況、成果等について自己評価を行った。その上で第三者の視点により事業全体を俯瞰し、目的・アウトカムに対する評価を受けること、評価委員からのフィードバックを活かし、今後の事業への継続・展開に繋げることを目的に第三者評価を実施した（11月14-15日）。評価委員には、一般の立

場から大住力氏（公益社団法人 難病の子どもとその家族へ夢を 代表理事）、教育の立場から中尾優子氏（鹿児島大学大学院：母性・小児看護学講座 教授）、看護管理の立場から久家美智代氏（公益社団法人 長崎県看護協会 副会長）に委員を務めて頂いた。プログラムの妥当性・有効性・効率性・インパクト・持続可能性といった視点については、概ね良い評価であった。プログラム修了生へのインタビューの時間を設け、評価委員からの質疑応答が行われた。その中で、修了生からは、このプログラムに参加したことで、学習意欲を刺激されたり、より助産師の技を極めるための資格の習得への動機付けになった、自分が“井の中の蛙”であったことに気づいた、などの声が聴かれた。一方でいくつかの点で評価委員からプログラム実施への指摘を受けた。指摘を受けた点は以下の通りである。

- ・受講修了生の受講後の能動的な行動につながるための内容が盛り込まれているとよりよかった。
- ・修了証書の活用が不十分であった。このプログラムを受講したことが所属施設のみならず広く社会においても認識されていくことも大切ではないか。
- ・現在就業していない助産師に参加してもらうための工夫が必要ではないか。
- ・プログラムの修了生の人材活用、引いては母子の健康にどう助産師としてそれぞれの立場でかかわっていかれるかをプログラムとしてどう支援するかについて再考を望む。

#### 2. 「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」14大学合同成果発表フォーラム参加

本プログラムは、大学院と産業界等が協働して、社会人のキャリアアップに必要な高度かつ専門的な知識・技術・技能を身につけるための大学院プログラムを構築し普及する取り組みを通じて、人材養成を図るとともに、社会人の学び直しを推進する事業として全国の14大学が選定されて実施している。プログラム最終年度となり、それぞれの大学の取り組みや成果をお互いに発表し、社会人が学び直すためのポイントや継続的な事業展開のための工夫などをシェアする目的で合同フォーラムに参加した（2016年12月16日、於イイノカンファレンスセンター、東京<sup>4)</sup>）。各大学の成果発表に続き、フォーラムの中では、これまでの成果をどう広めていくか、また事業を継続するための資金獲得のことが焦点となり議論が行われた。本フォーラム内容は、共通のポータルサイト（<https://s-manabinaoshi.jp/>）に掲載されることになっている。

#### Ⅳ. 次年度以降のプログラムの継続について

本プログラムを開始後、長崎県下で21名の助産師が1～2年という期間をかけて、助産師として就業しながら、学び直しと仕事を両立してきた。また、受講生は何

## 活動報告

度か顔を合わせるうちにお互いに情報交換をしたり、親しくなる様子が伺えた。受講生同士もお互いをサポートしあいながら、ともに高めあいながら受講を進めてきたのだと考える。プログラム提供側も一方向だけの関わりではなく、受講生と共にプログラムを創ってきたように感じている。プログラムにより整備されたeラーニング受講のためのシステムや、ビデオ教材、講義資料、講師との連携、そして何より県下の助産師のネットワークを今後も最大限活かしていけるように、3年間程度はプログラムを続行し、長崎の助産師が“生き生きと”働くための支援を継続したいと考えている。本プログラムは長崎大学の履修証明プログラムでもあるが、次年度からはコースカリキュラムの見直しをし、2コースを統合し1年間のコースへと変更する。1年間で120時間（8単位）を履修することで、履修証明プログラムの要件を満たし、かつ、科目等履修生制度の適用が受けられるようにした。今後、大学院進学を希望する場合、4単位を既習科目として互換することができるというものである。就業中もしくは今後また助産師として復職したいという助産師が、受講しやすいような環境を整えるとともに、魅力的なプ

ログラムとなるように、また、助産師自身の情報交換の場となり発展していけるように工夫していきたいと考えている。本コースを修了した受講生たちが、自らのキャリアアップと職場を変革していく力が得られるように今後とも後押ししていきたい。

## 文献

- 1) 松井香子, 松村悠子, 新谷隆弘, 佐々木規子, 加藤千穂, 永橋美幸, 宮原春美, 大石和代, 赤星衣美, 野間田真紀子, 江藤宏美:「生き生きと働く実践力のある助産師キャリアアッププログラム」実施報告2015. 保健学研究, 29: 97-103, 2017
- 2) ラボラトリー方式体験学習: <http://jiel.jp/> (2017年2月14日アクセス)
- 3) 目黒 悟, 永井睦子: 看護の学びを支える授業デザインワークブック: 実りある院内研修・臨地実習・講義・演習に向けて. メジカルフレンド社, 2013
- 4) 高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム: <https://s-manabinaoshi.jp/> (2017年3月2日アクセス)

## Report of Career Development Program for Active Midwives 2016

Yoshiko MATSUI<sup>1</sup>, Hiromi ETO<sup>1</sup>, Chiho KATO<sup>1</sup>

Noriko SASAKI<sup>1</sup>, Miyuki NAGAHASHI<sup>1</sup>, Harumi MIYAHARA<sup>1</sup>

Kazuyo OISHI<sup>1</sup>, Emi AKAHOSHI<sup>2</sup>, Makiko NOMADA<sup>3</sup>

1 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences Health Sciences

2 Nagasaki University Hospital

3 Project Mam Sakuranosato Birth Center

Received 8 March 2017

Accepted 24 April 2017

